

公演 こぼれ話

チエリスト

ステイヴン・イツサリス



公演にまつわるエピソード

長久手市文化の家 事業係 生田 創

ステイヴン・イツサリスは現代最高峰のチエリストの一人です。

2010年6月に文化の家でキッズ・プログラムとリサイタルを2日間にわたって行う準備を進めていきました。

公演一ヶ月前のある日、所属事務所から

一本の電話が入りました。「家族の健康上の都合で、イツサリスは来日できなくなりました」。

文化の家開館10年で初めての『公演中止』を決定し、払い戻しの手続きを行い、なんとか事なきを得ました。このトラブルでもっとも印象的だったことは、すでにチケットを買ってくださった多くのお客さんから「残念ですね。とても素晴らしいアーティストなので、次の機会は必ず行きます」と温かい言葉をいただいたことでした。

数ヶ月後再び事務所より連絡がありました。

イツサリスが、翌2011年の5月にN響との共演のため短期間来日するが、本人いわく「今回お客様や子ども達に会えずとても残念な思いをしたのでぜひ長久手で演奏したい」というものでした。残念ながらホールが空いておらず断念しましたが、心からうれしく思いました。

2011年、3月11日の震災の影響で多くの外来演奏家たちがキャンセルする中、イツサリスは予定どおり来日し、NHK交響楽団とウォルトンのチェ

ロ協奏曲を共演した様子がテレビで放映されました。その音楽性やカリスマ性はますます円熟味を帯び、大変感銘を受けたと同時に、長久手公演実現への想いがより強くなりました。

そして、ビッグニュースが飛び込んで来ました。「2012年11月、オール・ベートーヴェン・プログラムを引っさげてイツサリス来日！共演はフォルテピアノの大御所ロバート・レヴィン！」。

短い来日の中で唯一の土日を押さえることができ、かくして東京と長久手のみというスペシャル公演が実現するにいたったのでした。

長久手公演の大きな特徴は、キッズ・プログラムでした。イツサリスは、子どものための音楽エッセイを多く出版していて、音楽の研究者としても知られています。当日は、演奏はもちろんのこと、エッセイの朗読やリクエストコーナーなどトークを交えて、子どもたちとの楽しい交流が生まれました。終演後、子どもたちがこの公演にさきがけて描いた30点近くの作品すべてに直筆のメッセージを書いてくれました。

翌日のリサイタルは一転、究極のベートーヴェンともいうべき熱演が繰り広げられました。フォルテピアノのロバート・レヴィンの演奏も素晴らしく、イツサリスとの掛け合いはまさに丁々発止、ライヴならではの醍醐味が凝縮された名演に聴衆が興奮し、酔いしれました。

アンコールでは、バッハのオルガン曲か

らコラール(BWV639)が演奏されました。実はイツサリスはバッハをめったに人前で弾かない、と聞いていたのでびっくりしました。私の知り合いが終演後のサイン会で選曲の理由を訊ねたところ、こう言われたそうです。

「この曲以外にありますか？」

アンケートなどで「やつと会えてうれしかった」という感想を多数いただきました。

公演中止から4年、夢が叶った瞬間でした。



キッズプログラムでの演奏を終えてピアノ伴奏のロバート・レヴィンさんとにこやかに肩を組むイツサリスさん



イツサリスさんは、キッズプログラムの演奏後、一人ひとりに優しく声をかけサインに応じていました